

## ガイドライン改定後の臨地実習を終えて

松本花恋\* 宮井 優\* 古谷仁志\*§

### I. 研究の概要

#### 【はじめに】

臨床検査技師等に関する法律施行令、臨床検査技師学校養成所指定規則の一部改正により、2022年4月入学生から臨地実習ガイドライン2021が適用となった。今回、新ガイドラインに基づく臨地実習を経験して、『4つの実習項目』『臨地実習前技能習得到達度評価』の2つの変更点に着目し、臨地実習終了後に学生へアンケート調査を実施したのでここで報告する。

#### 【4つの実習項目とは】

新ガイドラインでは『必ず実施する行為』、『必ず見学する行為』、『実施することが望ましい行為』、『見学することが望ましい行為』の4つの実習項目と詳細な行動目標が設定されている。実習生はそれぞれの項目についての実施の有無、評価方法を把握しながら実習を行うことになる。本校では、実習生がスムーズに実習するために自己評価表の記載や本校独自の実習項目チェック表を活用しながら臨地実習を行った。

#### 【臨地実習前技能習得到達度評価】

5日間で7科目のトレーニングを行った。トレーニング開始までに事前課題や実技内容、実技試験のチェックリストの提示があり、それらを活用しながらトレーニングを実施した。

実技試験は7科目中3科目(A項目4つ、共通項目2つ出題)で実施された。不合格者には再

トレーニング・再試験が実施された。

#### 【方法・結果】

今回変更点があったガイドライン中の『4つの実習項目』『臨地実習前技能習得到達度評価』について臨地実習を終えた実習生22名に匿名でアンケート調査を実施した。

『4つの実習項目』に対して「自己評価表を活用しながら実習を行えた」、「行動目標について把握しながら実習を行えた」と回答した実習生はともに90%であった。

『臨地実習前技能習得到達度評価』の内容については臨地実習で「役にたった」と回答した実習生が90%を占めた。特に役立つ教科は生理学的検査が多く、ついで微生物学的検査であった。しかしながら、トレーニングや実技試験において担当教員間に差があるという意見や学内トレーニングと臨地実習施設での検査方法や手順が異なり臨地実習中に戸惑ったという意見もみられた。

#### 【結 語】

「臨地実習ガイドライン2021」が適用となり、4つの実習項目において詳細な行動目標が設定されたことで、実習生は実習項目および詳細な行動目標を事前に把握した上で臨地実習を行う必要がある。臨地実習に臨むうえで最も役に立った臨地実習前技能習得到達度評価をより有意義なものにするため、担当教員間をはじめ学内実習と実習施設での手技のすり合わせが今後の課題であり、今後、実習生が円滑でより学びの多い、臨地実習を行え

\* 京都保健衛生専門学校第一臨床検査学科 § furuya@kyohosen.ac.jp

るようなシステムの構築が必要であると考えます。

## II. 受賞の感想

このたびの発表が評価され、受賞につながったことは非常に大きな喜びであった。成果を認めていただいたことは、私自身の学生生活において大きな励みとなり、学びを続ける上での自信にもつながった。振り返ると、今回の研究は私一人の力では決して成し得ず、日頃よりご指導くださった先生方や、共に学び支えてくれたクラスメイトの協力があってこそ実現できたものである。

発表をまとめる過程を通じて、知識を整理し直すことができただけでなく、教育や評価の在り方について考えるきっかけを得られた。受賞は一つの区切りであると同時に、今後の学びに向けて新たな意欲を与えてくれる大きな出来事となった。

## III. 将来への抱負

今回の発表を通して、臨床検査技師教育における「評価」の重要性を強く認識した。ただし、今後は教育への研究を深めるというよりも、臨床検査技師を目指す学生として自らの学びを充実させる

ことが最優先であると考えます。臨床の現場において確かな技能を身につけることが、自らの責務であると同時に、患者に還元できる第一歩となると考えます。

一方で、学生の立場でありながら、「教育」に触れた経験は私にとって大きな財産となった。評価方法の工夫や改善が学生の学習意欲に直結することを実感し、将来的には後進を支える立場に立つ可能性もあると感じている。今はまず臨床検査技師としての基礎を固めることに専念しつつ、この経験を胸に刻み、学びを活かしていきたい。

## IV. その他

本研究を通じて実感したのは、教育において理論と実践を擦り合わせながら改善を重ねる重要性である。制度的な枠組みであるガイドラインを基盤としながらも、現場での実情や学生の反応を踏まえて、実習前のトレーニングや実技試験を工夫することが教育の質を高める鍵となると考える。今回の学会発表は、成果を報告する場であると同時に、自らの経験を整理し直し、次につなげる貴重な機会であった。